

私が出会った、私だけの物語

NFS

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、篠ノ之東私^ノが彼等と一緒に、宇宙^{ソラ}の道を開いたお話。
そして、私達^ノが作り上げたIFなお話。

その
2

|

9

その
1

|

1

目次

その1

西暦2048年7月14日。

さて、何となくボイスメモを起動したのは良いけど…今日はなくんにも話す事がないんだよね。だから私、篠ノ之東の昔話…いや、8年前だから昔話という訳でもないかな?とにかく、過去の話でも録音するよ。

8年前の私は、まあ子供だったね。今だから言えるけど、そりやあもう子供だったよ。いい意味でも悪い意味でも。小さい頃から頭が良過ぎた所為で孤立して、コミュ障にもなるわ性格が変な方向に崩れるわで、遂にはアリスの不思議な国のコスプレもしてたからね…ああ、思い出すだけで恥ずかしいよ。

そんな私でも、一つだけ変わらない事があった。それが、宇宙への探究心。私達は宇宙の中でもチリ一つ程度の事しか知らない。だから、私は誰よりも宇宙の事を知りたかった。誰よりも遠くの宇宙へ飛び立ってみたかった。だからこそ、私は一つの次世代パワースーツの設計図を引いた。そのパワースーツの名前は、IS。正式名称はインフィニット・ストラトス。シールドエネルギーによって宇宙のデブリを防ぎ、ハイパーセンサーによって360度の視界を確保しつつ、数千〜数万kmもの距離の視界を得て、パッシング・イナージェル・キャンセラー P I C とブースターによって自由自在な飛行が可能。正に異次元レベルの技術のオンパレードのそれをレポートに纏め、私は学会に出席して発表した。

結果は…まあ普通に想像出来た事なんだけど、失笑の嵐。当時の技術では到底実現し得ない技術が多数使われていたのと、当時の私が高校生位の年齢だった事もあり、評価は「子供が作り出した空想の産物」。その時はまともに相手をされる事はなかった。

だけどあの時発表したからこそ、今の私が居る。あの時発表していなかったら、多分今の私は居ない。

…つとマズイ、回避回避。ん…ここは使う方が良いか。

——ドドドドド!!

よし、オツケー。デブリ群の回避成功、損害無し。

…それで、何処まで話してたっけ…確か、学会に発表してからの先は話してないかな。それでその時に出会ったのが、あの企業達だった。

その出会いが、私と「クラフト」の出会いを引き寄せたんだ。

□□□□□□

学会発表直後の私は、その結果の前に打ちひしがれて、涙を流しながら帰路に着こうとしていた。

「すみません、ちよつといいですか？」

「っ……………はい」

だけど、その前に後ろから私に話し掛けてきた人がいた。慌てて涙を拭って振り返ると、そこには一人の日本人の男がいて、すぐに学会にいた研究者の一人だと分かった。だから、私は嫌味を言われるのかと思つて身構えたんだけど…

「私、こういう者でして…出来れば、少々お話をと思ひ」

「……………AGシステム……………」

当時、世界の企業にはビッグ5と呼ばれる企業があつた。アメリカの「オーコリム」、日本の「AGシステム」、ヨーロッパの「フェイザー」、オーストラリアの「ピラナ」、ロシアの「キレックス」。彼等は今までの企業を驚かせるような技術や常識を作り上げ、その得意分野では右に出る者はいなかつた。そして、様々な分野に進出した5社は深刻な利害関係になつていた。当時はその利害関係も沈黙化させていったが、完全に無くなつたとは言ひ切れていなかった。

だけど、その時の私はそんな考えをしている暇などなかつた。私に声を掛けてきたのは、世界のビッグ5の一つ。何故そんな大企業が、学会に失笑された私に声を掛けてきたのは、その時の私には分からなかつた。

「…私に話して…一体何の？」

「話しといつても、今は一つだけ質問させて下さい。私は、貴女の宇宙

の果てを見てみたいという気持ちを、あの時にいた誰よりも深く感じ取りました。その気持ちは…本物なんですか？」

「……………はい」

真剣な目で私に質問してきた彼に、私も真剣に応えた。たとえばどんなに馬鹿にされようが、その気持ちだけは絶対だったから。すると、彼は私の答えに満足したのか、笑みを浮かべた。

「…わかりました。では、また後日にお話をしたいので、連絡先を教えてください」

「っ、はい!!」

すぐに私は連絡先を交換し、そして学会の会場を後にした。その時の私の足は…多分、軽かったと思う。

□□□□□□

数日後、A G—システムから連絡が来た。その内容は、いきなり本社への招待状。それを聞いた時は驚いたね。いきなり本社に来いつてのは思ってもいかなかったし。

緊張しながらも東京にある本社に向かってみれば、そこには学会で会った彼がいた。彼の案内で社長室に通された。そこは、整然とした一室であり、何よりも4つのモニターが目についた。

「失礼します、社長」

「…彼女が、そうか」

「はい、篠ノ之東です」

そこで待っていたのは、A G—システムの社長「船引 広明」。厳格な表情で私を見た途端、私は反射的に礼をしていた。

「…君が目を掛けたのだ、即戦力には間違いあるまい。しかし、本当にあのプロジェクトに入れる気なのか？」

「あのプロジェクトの完成には、彼女の頭脳と技術が必要不可欠です。そして何よりも、彼女は宇宙を誰よりも欲しています」

「…それ程言うのなら、私は何も言うまい。『貴方方』も、そうであろうっ？」

その時、社長の後ろにあつた4つのモニターに光が入り、映像が映し出され、その映像に私は言葉を失った。

映っていたのは、オーコリム社長「アドコック・エイドリアン」、フェイザー社長「アリエル・アズナヴァール」、ピラナ社長「ウイリアム・スミス」、キレックス社長「フィグネリア・アルブゾヴァ」。ビッグ5の社長が、勢揃いしていた。

『ああ、プロジェクトの第一人者直々の言葉だ。現場の言葉を最重要視するのは当然だろう』

『私達としても、プロジェクト進行が手詰まっている現状況を快く思っていないわ。彼女の腕で解決出来るのなら、私達は彼女を歓迎する準備がある』

まず言葉を失っている私を他所に、まず口を開いたのはウイリアム・スミスとフィグネリア・アルブゾヴァ。

『だけど…此方から見た限り、まだ大学…いえ、高校生位の年齢よ。あのプロジェクトに入れるのは早過ぎるんじゃない?』

「此方から送った彼女の発表を見たでしょう?彼女は、間違いなく“天才”です。あのプロジェクトに入れないならば、彼女はその頭脳の技術を有り余らせる事になるでしょう」

次に口を開いたのは、アリエル・アズナヴァールと彼。

『…決まり、だな。だがまずは彼女に説明をし、彼女の同意を得てからだ』

そして最後は、アドコック・エイドリアン。

『多分、君は今混乱しているだろうね。だけど一から説明するから安心して欲しい。だけど、これは我々5社の企業秘密に関わる事だ。だから今から言う事を話す事になると、受けるにしろ断る事にしろ、君には口止めをして貰いたい。それが嫌ならば』

「大丈夫です」

アドコックの喋りを私は強引に止め、答えを出した。此処で私が嫌という理由は無く、私の夢に近付ける唯一かもしれないチャンスを掴まない選択肢は、無かった。

『…なるほど、やはり彼が目を掛けただけはある。では、話そう。我々

ビッグ5は今、秘密裏に協力してとあるプロジェクトを進行している。そのプロジェクトの名は、"クラフトプロジェクト"』

『我々人類は今、地球のみでその版図を広げているが、何れ資源や土地が足りなくなるのは目に見えている。そこで我々は宇宙への無限の可能性に賭け、現在個人運用を可能とした小型宇宙進出機、コードネーム"クラフト"を開発している』

『7年の歳月を掛けて、我々は一号機の完成に成功したが、それはまだ宇宙進出に必要なスペックには程遠く、何よりも重要機関である"反重力ジェネレータ"が不安定だった。しかし、改良しようにも具体案が見つからず、プロジェクトの進行が止まってしまった。そこに現れたのが：君だ、篠ノ之束君』

『君が学会で発表した内容を見せて貰ったが、君の頭脳と技術があれば、我々と君の悲願が達成できるだろう。我々に、その力を貸してくれないか？勿論、それに値する報酬は与えよう。クラフトプロジェクトの為ならば、我々は協力は惜しまない』

話された内容は、私にとって余りにも魅力的な提案だった。世界を股に掛けるビッグ5が協力して開発している宇宙への道。これを受ければ、コッソリとはいえビッグ5全ての企業がバックに付き、時間が許す限りその開発をする事が出来る。断れば、この話は無くなる上にこの話の口止めをしなければならぬ。

ISは開発出来なくなるけど、正に百利あつて一害なし。

「…やります。やらせて下さい!!」

その提案を、私は受けた。

『ようこそビッグ5へ、篠ノ之束君。我々は君を歓迎しよう。そして、共に宇宙を目指そう』

そして、此処から私は変わっていった。



クラフトプロジェクトに新たに入る事になった私は、すぐさまクラフトプロジェクトの開発ラボへと所属する事になった。そこはアメリカにある、表向きはオーコリムが買収した土地に超巨大な建物を建造した所。クラフトの実験の為に一定の広さと機密を保持する為にはアメリカが一番最適だった。私の夢の為とはいえ、箒ちゃんと離れになってしまうのはとても辛かったけど、背に腹は変えられなかった。半年に一度は必ず帰ると約束して、私はアメリカに飛び立った。

そして、新人の私の紹介をしたらすぐさま開発。クラフトプロトタイプ1号機は問題しか抱えていなかったから、まずは全体的な改善を試みてみた。そうやって完成した2号機は…最早別物だったね。二回り位小型になったし。

その後も3号機、4号機と様々な方向からアプローチしたプロトタイプ機が完成していった。けど…とある問題点だけは、どうしても改善出来なかった。

それは、反重力ジェネレータ。これだけは私がいくら理論を立てようが、いくら改善しようが言うことを聞かなかった。その時の私にとって初めて経験した「詰まり」に、私は焦っていた。だからこそ、私はミスを犯してしまった。

『反重力ジェネレータ、出力レベル7!!もう無茶だ篠ノ之、脱出しろ!!』

「まだ大丈夫、データ取り続けて!!A-06、A-16出力回路閉鎖、ブースター出力120%!!」

『馬鹿野郎、そんな速度で走り続けたら事故るぞ!!死にたいのか!!』
「大丈夫だよ、エアブレーキとバックブースター全開で速度は…っ!? 何、バランスが…!!」

『束え!!』

私が運転を担当したプロトタイプ7号機の試作運転で、私は無茶をすることで事故を起こした。その時の記録映像を見た時は…よく生きてたなく、って本心から思ったよ。何せ700km/h超えの速度から、バックブースターの出力バランスの差で横転してからの数十回

転。最後は壁に激突して機体はボロツボロ。私も瀕死の重傷を負って、目を覚ましたのは3ヶ月後だった。

目を覚ました時には側に彼が居て、何であんな無茶したかを聞いてきた。黙っててもしようがなかったから、私は本心を喋ったら…

「…馬鹿野郎」

「え？」

「馬鹿野郎だよ、お前は。何でそんな大事な事を誰にも相談しなかった？俺達は“個人”じゃない、“チーム”だ。誰か一人でも欠けるだけでも、“チーム”は成り立たなくなるんだよ。お前の心に気付けなかった俺達にも責任はあるが、お前にも責任がある。もっと他人を頼れ。“チーム”を頼れ。お前は此処にいる限り一人じゃねえんだからな」

：正直、心にキユンときたね。あの状況であの言葉は威力が強過ぎ。それに：拗れてたとはいえ色々と初心だった事もあるんだよねえ…

話逸れたから戻すよ。で、退院後はその言葉をきっかけに皆を頼るようになって、無茶もしなくなつた。その後は：トライアンドエラー、試行錯誤を繰り返してつた感じだね。改善すべき点を見つけては改善し、改良すべき所を話し合つては改良し、変更すべき所を決めては変更し。

それから3年後。クラフトプロジェクトは、遂に完了した。その栄えある完成機第一号の機体名は、“Nx1000”。

新たな大発明の発表は、世界中を驚かせた。常識をひっくり返したのもあるけど、その開発した企業がビッグ5。利害関係と思われていた大企業達が協力し合っていた、正に奇跡の産物だったのだからね。勿論疑っていた人もいたから、デモンストレーションはすぐに行われた。場所はネバダ砂漠。そしてデモンストレーションは大成功。燃料を必要とせず、大量生産を可能とした全領域進入可能な、まるで空想の世界から飛び出してきた夢の乗り物に、人々は喜んで迎え入れた。

そして、今――

□□□□□□

私は相棒であるピラナ製クラフト「ヴィンド」に乗って、宇宙から地球の帰路に付いている。クラフトが大量生産する体制が整った後、私は開発ラボから宇宙探査部へと異動し、宇宙探索を行っている。ヴィンドは私とピラナ社で作り上げた、私だけのクラフト。とことんスピードに拘った結果、私以外には誰も乗りこなせないじゃじゃ馬。私にとってはただの子犬同然だけだね。

…今思うと、本当に私は変わったと思うよ。あの拗れた性格が戻ると、仲間が出来たし、それに彼とも結婚したし。結婚の事はちーちゃんに伝えたら凄くショック受けてたし、箒ちゃんに伝えたら凄く驚いてた…その反応も無理が無いのが何とも言えないけど。

彼とは中々会えないけど…二人共忙しいし、彼は彼でやるべき事があるから、私は邪魔はしたくない。それに…うん。一夜を過ごすのが凄く大変。そう言った意味でも偶に会う位が丁度良いんだよね、あははは…

…兎に角、あと2時間で地球に戻る予定だし、それに今日は彼と2ヶ月振りに会えるんだよね。久し振りに一緒に食事出来るし、久し振りに家にも帰れる。箒ちゃんには明後日会う予定だからそっちの準備もしとかないといけないし、来週は反重力レースの出場もあるからヴィンドの精密検査も…：…凄く今更だけど、帰っても大変だなあ。

…さて。まだ時間はあるけど、大気圏突入の準備をしないといけなから、そろそろボイスメモを終了するね。

あ、またデブリ群…これは避ける方向でいいや。ちよつと規模は大きいけど…ヴィンドと私ならこの程度、お茶の子さいさい。

その2

地球に帰還してから4日目。私はピラナ社の倉庫を借り、ヴィンドの下に潜り込んで整備を行っている。

「この回路がこうで、こつちの回路はこうさせて…」

今私がしているのは、ヴィンドをレース用に調整する整備。日々には、ビッグ5が主催している第4回反重力レースのエキシビジョンマッチが行われるんだけど、それに私は出場する。レースにもヴィンドに乗るけど、宇宙用の調整のままだとブースターの出力が高過ぎでコーナリングの制御が出来ない。だからブースターの出力にリミッターを掛けて、浮いた出力をハンドリング反応に振り分ける。それと40口径機銃に装填されてる弾薬を抜いて、暴発を防止。

これでヴィンドはレース用のスピードクラフトに早変わり。ブースター出力はカーナリー抑えるけど、それでもピラナ製スピードクラフトより速いんだよねー、ヴィンド。その分ハンドリングは空気抵抗も合わさって凄く重いし、コーナリング時にはある程度速度落とすのが普通。だからレース用調整を施したヴィンドに付けられた渾名は「直線番長」。その名の通り、ストレートは誰よりも速いけど、コーナリングは如何してもアウトコース気味になる。これがヴィンドの弱点であり、私に勝つ為の唯一の活路。

私以外でエキシビジョンマッチに出場するレーサーは、決勝戦のトップ3。

一人目は、第2回から第4回反重力レースの優勝を飾っている、私の友人である「織斑千冬」。

ちーちゃんが乗るレースクラフトは、フェイザー製スピードクラフト「暮桜」。ベースとなったクラフトは、万人に扱えるスピード型オールラウンダー。コーナリングの速度は全クラフトの中でもトップレベルで、相互的な機動性はピラナ製スピードクラフトにも劣らない。

二人目は「ステファアーヌ・デユノア」。彼女が乗っていたフェイザー製スピードクラフト「ラファール」：映像を見たけど、どうやら

フェイザー社の新型クラフトのプロトタイプらしく、ターボとハンドリングに特化した性能を持っている。通常の最高速度は他のスピードクラフトに劣ってて、かなり尖ってる性能。だけどターボの使いどころを見極めていけば、もしかしたら私でも危ないかもしれない。

三人目は、ちーちゃんを破って今回の第5回反重力レースで優勝を飾った「ジョシユア・オブライエン」。彼が操るクラフトは、ピラナ製アジリティクラフト「ホワイト・グリント」。ベースになったクラフトはピラナ製にしては珍しく、スピードとハンドリングのバランスが良く取れているクラフト。それを更に改良し、更にスピードとハンドリングを高めたクラフトで、最早アジリティクラフトじゃなくてスピードクラフトなんだよね、あれ。ハンドリング重視のアジリティクラフトがベースなのにあの速さって何さ。あんな魔改造クラフト、私でも出来るかわからないよ。

決勝戦ではちーちゃんが途中までトップを死守してたけど、最終的にはちーちゃんを抜いて優勝。実力はちーちゃんと同格……いや、それ以上。

とまあ、今大会のトップ3ただけあって、かなり強い。オーコリム、キレックス、AGシステムのクラフトはトップ3に入れてなかったから、エキシビジョンマッチのクラフトはフェイザーとピラナ製レースクラフトのみ。

今までは全て私の勝利で飾ってたけど……今回ばかりはどう転ぶかわからない。明日、エキシビジョンマッチに使用されるサーキットの下見があるから、そこでコースをしっかりと見てみないとね。

「東、そろそろ夕飯でも食ったらどうだ？」

「あれ、もうそんな時間………えっ？」

そう考えながら整備してた私に、突然声が掛かったから返事をしたけど……その声は、今は此処に居ないはずの人物。驚いてヴィンドから顔を出してみれば、そこには「私の旦那様彼」が居た。

「ちよ、何で貴方が此処にいるの!? まだ会議をやってるんじゃない？」

「それならパッと終わらせてきた。折角一緒に入れる時間があるんだ、お前も1秒でも長く一緒に居たいだろ？」

「…そ、それはそうだけどさく…」

「とりあえず、手。起こすから」

「あ、うん」

差し出した手を掴んだ瞬間、彼は台車に乗っていた私を力強く引つ張ってくれた。…あーもう、こういうのがいちいちカッコいいんだから。

そして近くにあった小さいコンテナに座り、汚れた手で触らないように紙で包んだ…多分カレーパンだね、それを私に無言で差し出してくれた。

「…あれ、もしかして手作り?」

「ああ、キッチンと食材を少し借りた」

…本当に、私の旦那様はチートだと思う。研究者なのに身体能力は高いし、色々スキルは身に付いてるし、手料理は凄く美味しい。普通逆だよ、こういうのって。私が色々と出来てなきやいけないよね。

「それで、ヴィンドの調整はどうだ?」

「レース用の転換調整は終わったよ。今はハンドリングとブースター出力のバランスの微調整だね」

「…ちよつと見てもいいか?」

「うん」

私の了承を得て、彼はすぐにヴィンドの下に潜った。正直な話、クラフトの生みの親と私は言われているけど、最初からクラフトプロジェクトの第一人者だった彼の方が、私よりクラフトをよく知っている。今でも、多分彼が一からクラフトを作るなら、私が一から作るクラフトには負けると思う。確かに、私は天才なのかもしれない。だけど、私にも出来ない事はある。そんな私を彼が支えて、彼が出来ない事を私が…支えて…あれ、彼が出来ない事って何かあったっけ…寧ろ私が彼に支えられてるだけのよう…

と、とにかく私と彼は一緒に支え合っている。支え合ってるんだよ、うん。

「……………東。此処の回路の回し方についてなんだが、ちよつと話をし

たい」

「え、ホントに？」

「ああ、ちよつと来てくれ」

残ってたカレーパンをすぐに食べて、残った紙で汚れを拭き取り、もう一つ台車を持ってきて私もヴィンドの下に潜って彼の隣に付ける。

「このB―21回路、此処からエネルギーを直接ハンドリングに回してるのか？」

「うん」

「だったらこのまま直結させるのはちよつとマズイぞ。確かにこの方法ならハンドリング性能の大幅な向上は期待できるが、回路に余計な負荷が掛かりやすくなる。少し効率は落ちるが、此処を迂回させると良い」

「でも、それじゃそこに負荷が掛からないかな？」

「大丈夫だ。見た感じ、此処のエネルギー許容量はまだ余裕がある。この回路を入れ込んでも問題はないだろう」

「それで、そこから新しい回路を繋ぐ感じかな？」

「ああ。…これで大丈夫だ。それとこれなんだが、この回路は如何してこうなっている？」

「あー、それね。私も悩んだんだけど、ホワイト・グリントの性能を考えるとこうする方が良いかなーって。今回のレース、彼が一番私に食い付いてくるだろうから、最高速度より加速度を上げて立ち直りを良くしてみたいんだ」

「だったらこつちの回路を引っ張ってくるのも手だ。ターボの供給率は悪くなるが、余ってる此処の回路を回せば何とかなるかもしれない」

「うーん……………いや、このままで行くよ。ターボの供給率は出来るだけ落としたいくないんだよね」

「分かった」

…他のレーサーからしたら、結構ズルい事してるんだろうなあ。何せ、整備しているのがクラフトの生みの親とクラフトプロジェクトの

第一人者。だけど、ヴィンドは他のクラフトと比べるととても繊細なクラフト。少しの回路の接続ミスだけでもバランスが崩れて大事故に繋がるから、私達だけで整備しなければならぬ。

「…これでよし。一旦エンジン入れて確認だ」

「りよーかい」

すぐに私達はヴィンドの下から出て、私はキャノピーを開けてコックピットに入り、彼は検査装置の立ち上げを行う。

「準備オーケーだ」

「それじゃ、行くよ」

彼の合図で、私はキーを差し込んでエンジンをスタートさせる。そして甲高いエンジンの起動音が鳴り、同時に投影式 ヘッドアップディスプレイ H U Dが起動する。とはいえ、本格始動はしないから今は何も操作はしないけど。

「どう？」

「回路及び反重力ジェネレータの負荷は許容範囲内。異常無しだ」

それを聞いて私はエンジンを切り、ヴィンドをすぐに休ませた。明日と明々後日には頑張つて貰うから、今のうちにたっぷり休ませとかないと、ね。

「後は、コース確認と最終調整だな」

「うん。ありがとうね、調整に付き合つてもらつて」

「自分の妻に協力しない理由はないだろ？それに、俺も束を応援しているからな」

…ホント、恥ずかしい事をどんどん言うよね。負けられない理由がもう一つ出来ちゃうし。多分今、私の頬は真っ赤になつてると思う。

「…さて、そろそろ時間も時間だ。寝床を借りて用意するか」

「…一緒に？」

「嫌か？」

「ううん。行こう」

彼の腕を掴んで肩に軽く顔を寄せ、一緒に歩く。むう…折角当てるのに、中々反応が無いなあ…ま、いいや。何にせよ、明日からレースのコース取りが始まるから、今日は私もたっぷり休まないと、ね。

その後、私と彼は倉庫に鍵を掛け、空いてた部屋に泊まった。あ、一緒の毛布には入ったけどしつかり健全だよ。流石にレースが控えてるからね。